

開館 30 周年記念特別展「美術館の七燈」

2019年3月9日(土)～5月26日(日)

美術館がまもるものと、美術館をまもるもの 平成元年の開館以降 30 年にわたる活動を振り返る

広島市現代美術館は 1989 年、公立館としては国内初の現代美術を専門とする美術館としてオープンしました。その 30 周年を記念し、活動の軌跡および、その基盤となった美術館建築を中心に紹介する本展では、これまでに当館が収集してきたコレクション、および活動を物語る資料を中心に、一部の参加作家による新作等を加え、全館を用いた展示を行います。観客、建築、場所、保存、歴史、逸脱、あいだ、といったキーワードを通して、その歩みを振り返るとともに、美術館の果たすべき役割、そして活動を支える諸要素を改めて捉えなおします。

展覧会構成 (7 章)

※記載内容については変更することがあります。

1 章：「観客」参加によって成り立つ表現

言うまでもなく、観客の存在なくして、美術館は存続しえません。こうした美術館という場の特質を象徴するかのような、観客の動きかけや参加によって成立する作品を、本展のはじまりを飾るセクションで紹介します。

2 章：「葦とシンボル」美術館建築と野外彫刻

広島市現代美術館はそれ自体がひとつの建築作品でもあり、また、恒久設置される彫刻作品や館内の数々の意匠と一体となった、作品収集と鑑賞のための場でもあります。このコーナーでは、建築作品としての魅力をさぐると共に、家具やサイン計画といった意匠、さらには、建築と一体となった彫刻作品を中心に紹介します。

3 章：「ここ」広島、ヒロシマ

美術館とそれらが設置された場所とは切っても切り離せない関係にあります。加えて、広島が被爆都市としての意味合いを強調して語られるとき、「ヒロシマ」とカタカナで記されます。当館において、「広島」と「ヒロシマ」という 2 つの都市の名はいずれもが、活動の重要なテーマとなってきました。

4 章：「残すこと」作品の修復、コンサベーションの現在

美術館の重要な役割のひとつに、作品や資料の収集と保存があります。そうしたなか、現代美術における、伝統的ではない材料や技法を用いた作品や、まったく異なる考えに基づく作品の出現は、作品を残すということに、大きな課題を投げかけています。

5 章：「積み重ね」資料と関連作品による活動の記録 (構成・デザイン：又又)

美術館の活動は、その連続性や積み重ねの中でその都度検討され、方向付けられてきました。当館の準備室が設置されてから現在までの歩みを関連作品や資料を交え、広島を拠点に活動するデザインユニット・又又 (マタマタ) による構成で振り返ります。

6 章：「(リ)サーチ」探索と逸脱 田村友一郎による新作インスタレーション

歴史や背景を踏まえることと、想像によって飛躍させること。作家・田村友一郎は、場所や事物の背景を探りつつ、諸要素を空想的に結びつけた物語を紡ぎ、インスタレーション作品へと結実させます。本展では、当館の建築や開館当時の時代に関する探索と大胆な連想を展開させます。

7 章：「あいだ、隙間、その他」隙間的スペースを活用した作品

通常の展示では用いないようなスペースの新たな活用案を募集する公募展「ゲンビどこでも企画公募」をはじめ、これまでに多くの作家が、空間を創造的に読み替え、展示してきました。こうした表現は美術館による旧来の枠組みにとらわれない表現の在り方を示しているのかもしれませんが。

開催概要

【会期】	2019年3月9日(土)～5月26日(日)
【開館時間】	10:00-17:00 ※入場は 16:30 まで
【休館日】	月曜日 (4月29日、5月6日は開館)、5月7日(火)
【観覧料】	一般 1,200(1,000)円、大学生 900(700)円、高校生・65歳以上 600(500)円 ※中学生以下無料 ※5月5日(こどもの日)は高校生無料 ※()内は前売り及び 30人以上の団体料金
【主催】	広島市現代美術館、中国新聞社



オノ・ヨーコ《ウィッシュ・ツリー・フォー・ヒロシマ》2011 [1章]



アルフレド・ジャー《われらの狂気を生き延びる道を教えよ (ヒロシマのために)》1995 [3章]



飯川雄大《デコレータークラブプロジェクト「衝動とその周辺にあるもの」》2017 [7章]